20

「甘」

二〇　★　甘

僕は、おそらく生来の甘党だと思う。

なるべく普段はそういうものを控えるようにしている。スイーツや菓子パン類は商品棚の前で見て満足するだけ。買うならせいぜいフルーツ。体のためにもその方がいい。

それでも先日、体がなのか頭がなのか、甘いものをどうしても欲する夜があった。たくさんエネルギーを消費して、ちょっとミスなんかもして、少しばかり疲れていたのかもしれない。スーパーで日用品を買い足すついでに、スイーツコーナーの前で立ち止まり、『大きな』を売り文句にしたシュークリームをひとつカゴに入れた。さらに、レジ付近に並ぶ菓子パンたちの中から、白いホイップがぎっしり挟まった柔らかなパンを念押しのようにもうひとつ。

正直やりすぎだ。でも、どちらも外せない夜だった。

買い物を終え、袋をわざとぶらんぶらんさせて遊びながら帰る。というのも、通りがいつもより静かで僕以外に人がいないのだ。気がついたらすっと手が伸びて、家で食べるつもりだった例のパンを取り出していた。ギザギザした包みを破って開封し、細長いコッペをスライドさせ、端からひとかじり。ここのモーションは速かった。しっとりした甘さが舌に広がる。ゆっくり身体中に染み渡るように。

行儀のいい行為ではない。外で、しかも歩きながら食べるなんて本当はあまりしたくない。でも、その夜は風が気持ちよかった。月だけが僕を見ているような空間だった。空は僕の今日一日を見ていただろうから、きっと許してくれるだろう。そうやって自分を言いくるめて食べ進める。口いっぱいにふんわり膨らむ香りと、おそらく誰かには「甘すぎ！」って言われてしまいそうなほどの甘さ、まさしく背徳の味。それが僕にはちゃんと〝ご褒美〟の味になっていた。

今日はもう使い切ってしまったのだ。体力も、心の余白も。だから、何かで満たす必要があったのかもしれない。

ときに甘いものは「好きだから食べる」というよりも、「必要だから食べる」ものになることがある。心の奥底から、「君じゃないとだめだ」と求める瞬間がある。やっぱり僕という人間は、生来の甘党なんだろう。

月明かりの下で、こっそりパンをかじる自分を、今日はちょっぴり許してみようと思った。